

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：16201

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2013～2016

課題番号：25350724

研究課題名（和文）附属小学校との連携によるフェアプレイの般化を促進する体育授業の構築

研究課題名（英文）Development of a sports program enhancing generalization of fair play from gym to classroom

研究代表者

上野 耕平（Ueno, Kohei）

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：20311087

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：いじめなどの問題が噴出するなか、現代社会が体育・スポーツ活動に期待する事柄の一つとして、フェアプレイの日常生活場面への般化が挙げられる。そこで本研究ではフェアプレイとして鬼ごっこにおける援助行動に注目し、附属小学校との連携のもと、スポーツ活動及び体育授業の実践を通じて、援助行動の学校生活場面への般化を促進する体育授業を構築することを研究目的とした。本研究の結果、援助・被援助行動が頻繁に行われるなかま鬼及び、その効果を測定する援助自己効力感尺度を開発した。なお体育授業場面への実践及び日常生活場面への般化については新しい研究課題に引き継いだ。

研究成果の概要（英文）：In the troublesome situation of schools, people expect physical education (PE) to encourage students to generalize their fair play in sports from the gym to their classroom. This study focused on the helping behavior of students in a game of tag as one of the fair play methods in sports. The purpose of this study was to develop a sports program in PE to enhance the generalization of helping behavior from the gym to their classrooms in cooperation with an affiliated elementary school. Finally, a game of tag which includes rules that require the children to engage in many helping and help-seeking behaviors was developed. A scale of children's helping behavior-related self-efficacy was also prepared to measure effects of the game of tag.

研究分野：体育心理学

キーワード：鬼ごっこ 援助行動 向社会的行動 自己効力感 スポーツマンシップ

### 1. 研究開始当初の背景

近年、「いじめ」や「不登校」などの問題に象徴されるように、子どもを取り巻く状況が危機に瀕している。このようななか、現代社会が体育・スポーツ活動に期待する事柄の一つとして、身体活動を通じて身につけたフェアプレイの日常生活場面への般化が挙げられる。体育への参加を通じて学んだ内容、例えば「ズルをしない」、「仲間を助ける」といった行動が日常生活場面に般化・維持されるならば、体育に対して社会から寄せられる積極的な期待に応えると共に、社会が納得しうる体育の意義を説明することができると考えられた。しかしそのためには、1) フェアプレイの体育授業場面から日常生活場面への般化及び、その維持を確認する、2) 運動やスポーツの技術そのものに内包されているフェアプレイの要素に注目する、3) 統制群を用いた量的研究を行う必要が認められた。

### 2. 研究の目的

本研究では、本学附属小学校との連携のもと、フェアプレイに注目したスポーツ活動及び体育授業の実践を通じて、フェアプレイの学校生活場面への般化を促進する体育授業を構築すると共に、その効果について検討することを目的とした。本目的を達成するために、1) フェアプレイに注目したスポーツ活動の構築、2) フェアプレイに注目したスポーツ活動の効果を測定する尺度の開発、3) フェアプレイに注目したスポーツ活動の体育授業での実践、4) フェアプレイの学校生活場面への般化促進という4つの下位目標を立てた。その上で、それぞれの目標の達成に向けて研究を行った。

なお本研究については、平成 27 年度に「研究計画最終年度前年度の応募制度」を利用して、新しい研究課題に引き継いだことから、下位目標の3)及び4)については、本研究の対象から新研究課題へと移行させた。

### 3. 研究の方法

(1) フェアプレイに注目したスポーツ活動の構築に向けて、本研究者が附属小学校 2・3 年生約 20 名を対象に実施している学童保育活動(年 2 回×8 週:以下、キッズサポートとする)の一部において、フェアプレイに注目した運動あそび(鬼ごっこ)を実施した。鬼ごっこには「ズルをしない(触られたことを正直に認める)」、「仲間を助ける(逃げるだけでなく仲間を助けようと努力する)」、「弱い者いじめをしない(年下や女の子ばかりを狙わない)」など、フェアプレイとして日常生活場面への般化が期待される場面がいくつか認められる。ここではまず、1) 鬼ごっこにおけるどのような行動に着目するのか、2) 着目した行動をどのように獲得させるのかなどについて、運動あそびを繰り返し実施するなかで情報を収集した。

(2) フェアプレイに注目したスポーツ活動の効果を測定する尺度の開発に向けて、附属小学校に通う 2 年生から 4 年生までの児童を対象に調査を行い、213 名の男女児童(2 年生 64 名、3 年生 75 名、4 年生 74 名)から有効回答を得た。Midlarsky (1991) は援助経験が次なる援助行動を生み出す過程について、援助行動を行った結果得られる人生の有意義感や自己効力感の高まり、肯定的な気分などの援助成果を感じることで、援助行動に対する動機づけの高まりを導き、ひいては次なる援助行動に繋がるとするモデルを提唱している。そこで本研究では Midlarsky (1991) のモデルに基づき、「援助行動に対する効力の予期」を援助自己効力感と定義し、学校生活場面における児童の援助自己効力感を、児童の次なる援助行動を予測する変数として測定する尺度を作成する。調査に際して、吉村(2003)が作成している小学生用の向社会的行動尺度の下位尺度である「援助行動」を構成する質問項目をもとに、現職教員の意見を参考にしつつ児童の援助自己効力感を測定する 10 項目の質問を作成した。その上で児童用社会的スキル尺度(石川・小林, 1998) 児童用共感測定尺度(桜井, 1986)、さらには児童の過去 1 週間の援助頻度などとの比較により尺度の信頼性・妥当性を確認した。

(3) フェアプレイに注目したスポーツ活動の効果を測定するために、附属小学校 2・3 年生を対象としたキッズサポートに参加した児童の内、下記に示す 2 種類の鬼ごっこの双方に参加した 45 名(3 年生:男子 8 名、女子 1 名、2 年生:男子 19 名、女子 17 名)を調査対象者とした。調査では先の研究で作成した援助自己効力感尺度(低・中学年用)を鬼ごっこの前後に実施した。また援助行動を含む鬼ごっこ中の援助・被援助頻度についても確認した。さらに一部の児童(27 名)に対しては反復横とびの測定を行い、敏捷性の指標として分析に用いた。

### 4. 研究成果

(1) フェアプレイに注目したスポーツ活動の構築に関して、まず運動あそびにおける援助行動に注目し、キッズサポートに参加した児童を対象として鬼ごっこを繰り返し実施するなかで、最終的に援助行動を頻繁に含む鬼ごっこ(なかま鬼)を開発した。鬼ごっこは我が国だけでなく多くの国で広く行われている運動あそびであり、子どもにとって非常に身近なあそびである。そして鬼ごっこには参加者の敏捷性の発達を促進する動きが含まれており、生涯にわたってスポーツに親しむ上で必要とされる基礎的能力を培うのであれば、鬼ごっこは特に児童期に実施されるべき運動あそびである(上田, 2007)。従って、鬼ごっこはどこの国でも実施可能であり、児童期の心理社会的・身体的

発達を促進する体育の教材として大きなメリットがあると考えられた。

他方、鬼ごっこには仲間を助けるルールが認められることから、フェアプレイを学ぶ教材として利用できると考えられた。一般的に鬼ごっこは、できるだけ長い間鬼に捕まらないように逃げ切れることが技能の卓越を示すルールの下で行われる。しかし一部の鬼ごっこには、ただ単に自分だけ逃げ切るのではなく、鬼に捕まった仲間や共に逃げている仲間を助けつつ、自らも逃げ切れることを目指すルールが存在する。そこで本研究では、活動中に援助行動が頻繁に生じるようルールを整えた鬼ごっこ（なかま鬼）を、以下の通り開発した。

なかま鬼は体育館に描かれたバレーボール用ラインを活用した、縦9メートル、横6メートルのグリッドを1面として、4面に分かれて実施される。鬼は1人とし、逃げる側（以下、逃げ手とする）は5人である。逃げ手はグリッドの外に出ることはできず、グリッド内で逃げ回ることになる。しかし、鬼は手をつないでいる逃げ手にタッチすることはできないほか、逃げ手は何度でも手をつなぐ相手を変えることができる。従って、逃げ手は鬼に捕まらないようにまだ手をつないでいない仲間を探す一方、鬼に捕まえられそうな仲間を手を差し伸べることにより、仲間を助けることができる。なお、なかま鬼の実施前に、「仲間とつないだ手を離さないで自分だけが助かるのは簡単であるが、助けを求めている仲間を助けようとするに価値がある」ことを説明して行う。

以上のように、なかま鬼では頻繁に援助・被援助の機会が生じる。永井（2011）はこれまでの援助行動に関する研究をレビューし、援助行動を促進する個人内要因の一つとして過去の援助経験を挙げている。従って、なかま鬼における援助経験が次なる援助行動を促進すると考えられることから、援助行動の日常生活場面への般化に繋がるのではないかと予測された。

(2) フェアプレイに注目したスポーツ活動の効果を測定する尺度の開発に向けて、以下の通り分析を行った。

尺度の因子構造 まず児童用援助自己効力感尺度の因子構造を明らかにするために、10項目について探索的因子分析（主因子法）を行った。その結果、固有値の大きさが1.0を上回る因子は1つであり、本尺度は当初の想定通り1因子構造であることが確認された。一方で、低学年児童を対象として尺度を繰り返し使用することから、10項目による尺度構成では利便性が低くなると考えられた。そこで各質問項目の標本分布を再検討し、児童の50%以上が同じ回答を選択しており平均値が3.0を越えているなど、回答傾向に偏りが認められた質問項目4, 5, 8を除外した。その上で質問

項目1についても回答傾向に偏りが認められ、平均値が3.0を上回っていたことからこれも除外し6項目とした。以上の手続きを経て選択した6項目について再度探索的因子分析（主因子法）を行った。その結果、固有値の大きさが1.0を上回る因子は1つであり、6項目の尺度についても学校における児童の援助行動として解釈可能な項目から構成される1因子構造であることが確認された（表1）。

表1 援助自己効力感尺度（低・中学年用）の質問項目

No	質問項目
10	しっばいしておちこんでいる子をはげます
7	先生にしかられた子をなぐさめる
3	先生がにもつをはこんでいるときに手つたう
6	かかりや日直のしごとを手つたう
2	教室でけんかしている子がいたら先生をよびに行く
9	あそぶとき、教室でひとりになっている子もさそう

尺度の内的一貫性 児童用援助自己効力感尺度の内的一貫性について係数を算出した。その結果係数は.77であり、尺度として用いる上で必要な信頼性を満たしていると考えられた。

尺度の構成概念妥当性 尺度の構成概念妥当性を確認するために、6項目について確証的因子分析を行った。その結果、適合度指標は  $\chi^2(9, N=213) = 16.22, p = .06$ , RMSEA = .062, SRMR = .042であった。RMSEAは.07以下、SRMRは.08以下であることが一定の基準とされていることから、6項目からなるモデルは因子的に妥当であると考えられた。なお潜在変数から観測変数への標準化係数は.51から.78までの値を示していた。

尺度の基準関連妥当性 尺度の基準関連妥当性を確認するために、児童用援助自己効力感尺度、児童用社会的スキル尺度、児童用共感測定尺度、児童の過去1週間の援助頻度の各調査から得られた得点についてピアソンの積率相関係数を算出した。その結果、児童用援助自己効力感尺度との間の相関係数はそれぞれ1%水準で有意であり、児童用社会的スキル尺度 ( $r = .75$ )、児童用共感測定尺度 ( $r = .49$ )、児童の過去1週間の援助頻度 ( $r = .53$ )の値を示したことから、児童用援助自己効力感尺度は尺度として用いる上で必要な基準関連妥当性を備えていると考えられた。

以上のように、援助自己効力感尺度（低・中学年児童用）が開発された。援助自己効力感と社会的スキルとの間に強い相関関係が認められたことから、自己効力感の高さは実際に他者を助ける上で必要なスキルを獲得していることが裏付けになっている可能性が窺われた。また過去1週間の援助頻度とも少なからず相関関係が認められており、本結果

は本尺度への回答を用いて援助行動自体を簡易的に予測することができる可能性を示していると推察された。

(3) フェアプレイに注目したスポーツ活動の効果測定のために、なかま鬼及びルールに援助行動が含まれない鬼ごっこであるしっぽ取りの両方に参加した児童から得られたデータに基づき、以下の分析を行った。

なかま鬼への参加と児童の援助自己効力感との関係 鬼ごっこの種類(なかま鬼・しっぽ取り)及び調査時期(実施前・実施後)を独立変数、援助自己効力感を従属変数として、反復測定による分散分析を実施した(図1)。その結果、調査時期の主効果が有意( $F(1,44) = 4.45, p < .05, \eta^2 = .03$ )であり実施前よりも実施後の平均値の方が高かったほか、交互作用が有意傾向であった( $F(1,44) = 3.86, p = .06, \eta^2 = .03$ )。そこで試みに単純主効果を確認したところ、なかま鬼に参加した児童の実施前後の平均値の差が有意であり、実施前よりも実施後の方が高かった( $F(1, 88) = 8.24, p < .01, \eta^2 = .03$ )。以上の結果から、なかま鬼を実施することにより児童の援助自己効力感を高められる可能性が窺われた。

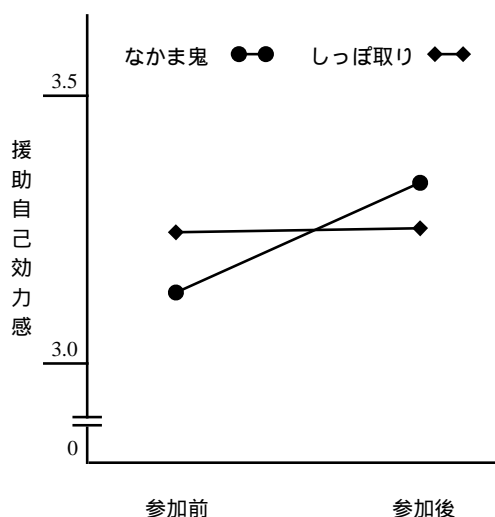


図1 運動あそびへの参加前後の援助自己効力感の変化

援助及び被援助行動と敏捷性の関係 援助頻度及び被援助頻度と反復横とびの回数との相関関係を確認した結果、両者の間に有意な相関は認められなかった( $r = -.15, p = .46; r = -.09, p = .66$ )。

本結果から、なかま鬼における援助及び被援助頻度に敏捷性は影響を及ぼさない可能性が窺われた。

運動あそびにおける援助経験としてなかま鬼における援助行動に注目し、なかま鬼への参加を通じた児童の援助自己効力感の変化について検討した。その結果、有意傾向に止まるものの、なかま鬼への参加と児童の援助自己効力感の変化との間には関係性が認められ、なかま鬼への参加を通じて児童の援助自己効力感が肯定的に変容する可能性が認

められた。本結果はなかま鬼への参加と児童の援助自己効力感の関係を示したものであり、児童の日常生活場面における援助行動に対するなかま鬼の影響を直接的に確認したものではない。しかし、援助自己効力感が過去の援助経験と.50程度の相関関係にあることからすれば、本結果は援助行動という児童の社会的な態度の育成に対してなかま鬼が肯定的な影響を及ぼす可能性を示すものである。梅垣・友添(2010)が指摘しているように、運動そのものに内在する道徳性や社会性を高める要素に注目した実践は体育の存在意義を示す上で役立つと考えられる。本研究で取り上げたなかま鬼は鬼ごっこに内在する「援助行動」に注目した活動であり、その成果を体育に応用することにより、体育の存在意義を示すことができると考えられた。他方、本結果は体ほぐし運動の教材としてなかま鬼が有効であることを示した。鬼ごっこが俊敏な動きを学習する上でよく用いられるように(日本サッカー協会, 2005)、一般的な鬼ごっこでは敏捷性に優る児童が有利となり、敏捷性に劣る児童は捕まえられる対象となることが必然的に多くなる。しかしなかま鬼では、援助・被援助頻度と敏捷性の間に共に相関関係は認められなかった。つまりなかま鬼において技能の卓越を示す援助行動が、敏捷性に優る一部の児童に偏っていたわけではなかったほか、被援助行動についても敏捷性に劣る児童に偏っていたわけではなかったと言える。本結果は運動の得意不得意を越えて仲間と運動を楽しむという体ほぐし運動の趣旨に沿うものであり(文部科学省, 2015)、なかま鬼は体ほぐし運動として適した運動あそびであると考えられた。本研究の結果、研究目的を達成するために示した4つの下位目標の内の2つについて回答を用意することができた。残り2つの目標については、本研究を引き継いだ新しい研究課題のもと既に検討されている状況にある。

#### <引用文献>

- Midlarsky, E. (1991) Helping as coping. In: Clark, M. S.(Ed.) Prosocial behavior. Sage: Newbury Park, CA, pp.238-264.
- 文部科学省(2015)学校体育実技指導資料第7集 体づくり運動 授業の考え方と進め方 改訂版. 東洋館出版:東京.
- 永井暁行(2011)援助行動に関する研究の動向と課題.中央大学大学院研究年報,40:53-69.
- 日本サッカー協会(2005)キッズドリル.日本サッカー協会.
- 桜井茂男(1986)児童における共感と向社会的行動の関係.教育心理学研究,34:342-346.
- 上田憲嗣(2007)豊かな運動感覚を育む低学年体育の在り方 コーディネーション能力の育成を構想する.体育科教育,55(10):36-39.

梅垣明美・友添秀則(2010)JTPE 掲載論文  
にみる体育における道徳学習と責任学習  
の研究動向．スポーツ教育学研究，29(2):  
1-16.

吉村真理子(2003)児童の「向社会的行動」  
測定を試み．千葉敬愛短期大学紀要，25:  
119-134.

## 5．主な発表論文等

[雑誌論文](計 2 件)

上野耕平、運動あそびにおける援助経験が  
児童の援助自己効力感に及ぼす影響、香川  
大学教育学部研究報告、査読無、Vol.148、  
2017、印刷中

上野耕平、援助行動を含む鬼ごっこ(お助  
け鬼・なかま鬼)への参加が児童の援助自  
己効力感に及ぼす影響、鳥取大学教育セン  
ター紀要、査読無、Vol.11、2014、pp.75-84

[学会発表](計 5 件)

上野耕平、援助行動を含む鬼ごっこへの参  
加が児童の援助自己効力感に及ぼす影響、  
日本体育学会、2016.8.24-26、大阪体育大  
学(大阪府・熊取町)

上野耕平、児童の援助行動の促進を意図し  
た鬼ごっこ(なかま鬼)の開発と実践、日  
本教育心理学会、2015.8.26-28、新潟大学  
(新潟県・新潟市)

Ueno, K.、Using a unique tag game to  
improve self-efficacy in helping  
behavior of children、2015.7.14-19、Bern  
(Switzerland)

上野耕平、児童の援助行動に対する自己効  
力感を促進する鬼ごっこ(なかま鬼)の開  
発、日本スポーツ教育学会、2014.10.25-26、  
愛媛大学(愛媛県・松山市)

上野耕平、児童の援助行動に注目した鬼ご  
っこの開発及びその心理的効果の検討、日  
本体育学会、2014.8.26-28、岩手大学(岩  
手県・盛岡市)

## 6．研究組織

(1)研究代表者

上野耕平 (UENO, Kohei)

香川大学・教育学部・准教授

研究者番号：20311087